

一、津島寿一先生の一周忌

津島寿一先生の一周忌は、去る二月七日の夕、津島家の主催で、パレス・ホテルでもたれた。南原繁先生（元東大総長、香川県人会会長）、君島一郎氏（元知事、旧一高時代の友人）、加藤藤太郎氏（神崎製紙会長）、金子正則知事、綾田整治百十四銀行頭取、鎌田坂出市長、堀家丸龜市長をはじめ、先生を欽慕する多くの方々が出席された。

とりわけ、旧丸中の後輩である白川画伯が心血を注いで描かれた、生けるような故人の肖像画が、東京丸高会から、未亡人に贈られたのは、当日のハイライトであった。蘇東坡の詩に「人生無離別、誰知恩愛重」というのがあるが、同席した私もそのままでの感懐であった。

去年の二月の始めのことである。総選挙から帰京した私は、その足で、赤坂見附の前田病院に先生を見舞った。先生は、即座に「俺が治ったら、君の当選祝いをやりたい。どいう方々を招くか、椎名君、ひとつリストを作ってみたまえ」といって、傍らの椎名秘書を促された。私は、

「いや、私が先生をお招きして、謝恩会を開きます。早く全快してください」と申し上げた。実は、先生の喜寿と勲一等受勲を兼ねてお祝いするため、一昨年、綾田頭取、津島惣平氏、加藤藤太郎氏、馬淵健一氏、三崎友一氏等と相計り、ホテル・オークラで先生御夫妻中心の会をもつたことがある。先生は、こよなくこの集りを悦ばれ、機会があれば、御自分でそのお返しをしたい御意向であつたようだ。偶々小生の当選を機会に、兼ねての宿願を果たそうと決意しておられたのだと思う。

ところがその後、急に御病状があらたまり、遂に二月七日に逝去された。全快を期しつつ遂に果たすことのできなかつた先生にとつては、痛恨事であつたにちがいない。ところが先生は全快を期待しつつも、万一の場合に備えて、遺書を用意されていた。それは至れり尽せりの周到を極めたものであつた。そして先生の遺産の大宗をなす麹町のお屋敷を、坂出市・丸亀市・高松市にそれぞれ適当に按分して寄贈すると共に、御令室の余生に対するこまごまとした、愛情のこもつた配慮が記録されてあつた。われわれ遺産の処分に関係した者も、御垂示の線に沿つて、一周忌までに一切の手続を終えたのである。坂出にある先生の墓碑には、みずからの筆で「終焉」と書かれてある。戒名は、墓碑の裏面に小生の拙筆で刻んでもらつた。終焉ということとは、ただにその生命が絶たれることを意味するものではなく、それに加えて、この世におけるみずからの営み

に、筋目の立った処理をすることを含むものであることを、先生は身を以て、そのことを実行されたのである。

先生の生涯は清福そのものであったが、その死もまた凜とした肅然たるものであった。われわれは、最早、津島先生の声咳に接することができない。しかし先生の遺徳は、静かな莊嚴な光彩を、いつまでも放ちつづけることである。

(昭 四三・三・二〇 彼岸の中目)